ユーフラテス河中流域における遊牧社会の発生と展開
シリア国ラッカ市周辺の考古学的調査

研究の目的

本研究はシリア・ユーフラテス河中流地域で考古学的調査をおこない、アッシリア、バビロンなど古代王朝の創建者・セム系アモリ集団が同地で出現し、発展した実態を検証するものです。研究対象となる年代すなわち紀元前3 千年紀末（前期青銅器時代末）の西アジア地方全域では、アッカド王朝の崩壊でもたらされた無政府的な混乱期が到来し、遺跡数の減少や遺跡規模の縮小という事象がもたらされたといわれています。本研究の代表者らは、このような混乱期における遺跡の実態を研究するため、平成17年度から5年間、ラッカ市近郊ユーフラテス河中流の集落遺跡ガーネム・アル・アリとその直近ワディ・ダバおよびワディ・シャブート墓地遺跡の発掘調査をおこないました。そして、同地ではこの混乱期に「定住集団の遊牧化」という事象が出現したとする仮説に到達しました。この新たな仮説を検証し、定住集団の遊牧集団化過程の実態を解明することが本研究の目的です。

研究の計画

ガーネム・アル・アリ遺跡とその直近ワディ・ダバ、ワディ・シャブート墓地遺跡を発掘し、同地における定住民の遊牧化過程の実態を検証します。発掘調査には、土器などの分析に基づく伝統的考古学手法に加えて、動・植物依存体研究、古環境研究という自然科学的調査が合流します。特に、動・植物依存体研究は定住民の生業形態と遊牧化の過程を知るために欠かせないものです。発掘調査で出土する自然科学的分析用資料は国内に搬送し、学外の研究機関に分析を委託します。

研究の特色

西アジア考古学においては、これまで遊牧社会と定住・都市社会を二項的に捉え、その対立構造を前提とする研究が推進されてきました。本研究のメンバーは定住民と遊牧民が相互に転換可能な柔軟性ある集団形態と考えています。最近になって、同様の見解も提起されつつありますが、考古学的な具体的根拠に基づく議論は皆無とも言える状況です。発掘調査に基づき定住社会と遊牧社会の相互関係を具体的に考察する本研究は、西アジア史研究に新たな学問領域を提起するもので、この点に大きな特色を有しています。